

集 句

念 常

著 一 春 瀧

自序

「常念」はこの句集の作品に縁故の深い信州の山、常念岳から名づけたものである。

たたかひの日、私の幼い子供達を疎開させた地も信州であつた。

「常念」は彼の日も、けふの日も、唯一筋に風雅の道をまもつて變らない私の心である。

昭和二十一年彌生

伎藝山房にて

著者

目次

自序	一
昭和十六年	三
昭和十七年	三三
昭和十八年	六一
昭和十九年	八七
昭和二十年	一〇九
後記	一三三
装幀近藤晴彦	

昭和十六年

清澄園四句

林泉や深川の町の冬ざれに

林泉や老幹の冬それぞれに

林泉や短日の日のさすらへる

翡翠を置きたる磐のさむき貌

をさな子と母と語れる冬至風呂

海
の
雲 大磯
朝 二句
の
秋
風
に
雀
ら
る
る

風 かき
雲 ぐも
の
一
片
と
あ
る
柘
榴
の
實

多
摩
の
横
山
日
が
な
青
靄
さ
む
き
山

水
仙
や
煙
草
に
染
ま
る
指
二
本

枯
蘆
原
い
つ
ぽ
ん
の
木
に
鴟
赤
し

妻の起た居み厨の寒さつきまどふ

曇り硝子銀杏の照葉十日まり

水仙や日の衰へにやすけき日

賣物の新鮠宿群れ師走の人泳ぐ

酒やめて五い年と酢牡蠣つめたけれ

居酒屋のバケツの鉢の八つ手咲く

初霜や鼠にシヤボン盗まるる

橋裏に短日の日の滞る

人情を卑しみひとり河豚を食ふ

でこぼここの橙だんごぬくめ懐ろ手

小説を讀む子の眼鏡さむくいとし

寒き机妻の世界に境しぬ

風邪に臥し身のやすらぎをわらへざる

雪の夜やおのれに聞かす身の幸を

大磯 二句

君訪へば海見るならひ冬麗ら

風 蔭 に 語 り 冬 濤 の 音 や さ し

寒 の 梅 蒼 空 に 浮 く 二 三 輪

寒 梅 や 朝 の 鳥 の 音 み だ す ま じ

煙 草 す ふ 指 さ き 熱 し 寒 の 梅

信 心 の 卑 俗 い と し や 寒 の 梅

三ツ峠 十五句

初富士の眞紅一瞬を心に留む

大富嶽びやく白光くわうの雪を浴び聳てり

雪の富嶽大き雪尾根奔り落つ

富嶽の雪炎え立つや吾が額熱し

初空の一方を占むる大富嶽

大富士の量感 冬日ただよへる

冬田枯野 其の上に天そそる富士

初富士も黄に片照りてうすづく日

初富士を剝りてふかき夕かげり

元日や 涸澤の石に腰下ろす

冬山の音なく松葉かがやき揺れ

山深き元日の風のさるをがせ

富士五湖の三つまり湛へ冬霞

枯寂びて雪なき山は濤のごと

雪照る山雪のみのは彌遠く

河口湖 六句

正月の家竝のうしろ逆さ富士

水鳥の胸白くならび湖明けぬ

冬日の山匂へり湖の眞蒼きに

冬日の熔^ら岩^ぼみなそこにあるも黒き熔岩

山湖なほ氷らず二日穩^{おだ}しく暮れ

落葉松の荒涼と風の空透けり

信州の太田君より水楊の花を贈らる

猫の爪きぞは樹氷の梢なりし

上州大間々 二句

澗の巖おのおの霞み起き臥せり

囀や渦は音なく巻きほぐれ

吾が子すでに英字を綴り杜鵑つばき花はな咲く

躑躅園さつきにかはり雲湧く野

杜鵑花をめづる朝な小綬鶏大聲に

六月や嬰^{あか}兒^ご負ふ母の若きうなじ

信州旅吟 五句

杏の花白き麓は日の出前

杏咲く里に櫟の山緒し

のめりゆく馬に紫雲英田鋤かれゆく

紫雲英田の半ば鋤かれて磊塊と

紫雲英田の色にかも似る山の雲

富士見附近

新緑の山塊朝の代田に澄む

馬の仔の栗毛に似たる山つつじ

げんげ田の峽に朝雲たゆたへる

松本在百瀬氏宅 三句

鈴蘭の香に立ち牡丹散りつくす

庭石にふりさざめくや若葉影

いくたびか茶にもてなされ夕若葉

浅間温泉小集 三句

句のまどぬ蠶飼を措きて寄りし娘も

面はゆく句を説くわれに新樹光

山の雨となりつつ宵の夏座敷

島々より澤渡へ 五句

新緑の山垣庇なす居雲

青空ゆ千^ち尺^{さか}の新樹なだれあふ

新樹よりゆらぎいづるや揚羽蝶

梓川しぶき新樹をどよもせり

一輪の牡丹ささげし山の神

白骨へ 四句

鮮かに懸巢あらはれ栃の花

ただよへる柳絮に峽のいや青き

緑蔭の蘇苔を奔り瀧なせり

涼み澤新樹の梢にうちそそぎ

白骨温泉 三句

湯元なる古き構の夏つばめ

湯の宿のいらへなかりし若葉風

青嵐裸のわれに爐の火あり

柿若葉家ぬちの馬をひきいだす

青嵐騎乗のわざも忘れざる

残雪の乗鞍に馬首を向け直す

吾が服に馬臭のしるく花茨

みづかふやアカシアの花のちる水を

大鍋に飼料かいの煮ゆる夕蛙

夏 夕 月 青 毛 飼 は る る 家 の 内

歸還の友へ

い か に 聞 く 峽 中 河 鹿 し ぐ れ か な

粽 食 ふ や み な 世 に 古 り し 男 ど も

夕 潮 の 音 白 鱈 に 箸 執 ら む

夕 明 り 月 夜 に か は る 茂 り か な

友情の酒におもむく梅雨の傘

梅雨晴や酒錢の残り子に與ふ

鈴懸の切り苛まれ夕焼けぬ

枝豆や俳談遠き世に終始

友の家に來てうたたねす花柘榴

酒断ちて話すばかりや蚊遣香

古利根川 六句

三伏の葦にささやく葭雀

凌^の霄^う花^ぜや古利根川のなまぐさき

病葉の降りそのいろに河流る

蒲焼を待つ間古江の照り暑く

炎天をとぶ白鷺の澄みとほり

棟の上に晩夏の燕首振るのみ

浅川高乗寺 三句

かなくに沈む一院萱の屋根

秋の蟬ひたと堂扉に堰かれたる

門外の秋の七草苑に見ず

秋の聲わが吸殻の一炷に

かなくが熊笹の露を吸ふ旦

三日月に山ちまくと片寄りぬ

かなくや僧俗白き單衣にて

青柿や晝餉の茶碗洗ひ伏せ

霧 雨 か 朝 顔 の 紺 ぶ か き 刻

一 と 夏 の 汗 の 背 廣 や 白 芙 蓉

秋 の 寺 樅 に 巢 函 の 見 ゆ る か な

水 の 秋 櫻 並 木 は 冬 す で に

初 嵐 西 の 庇 に 雨 こ ぼ れ

濁りなき子どもらの眼に雁渡る

茶を淹れて長子にわか秋燈下

大龍寺子規忌 三句

子規忌けふ手ほどの師も已に亡し

秋の暮子規に語れる虚子の聲

子規忌了へかうもり傘を肩に獨り

病む友を見舞ひて

鵬を聞くわれ健康に薄情に

長の灯消せば覺めゐて否む子よ

大磯三句

かいづ釣夕映の波をいなしつつ

磯の上の巨き箱根に秋日没る

花すすき相模灘あり相模野あり

野州三和村 十句

秋霞懸巢のこゑは誰も知る

ありありと檜山をくだる秋の蝶

わかし湯に膝つきあはせ秋の暮

鑛泉宿茸狩る人を泊むるのみ

晝の蟲月待つところおもむろに

十五夜花剪りて泉水にひたし置く

夕霧のそのまま望の月の影

月明の蟲の音巾と層ありぬ

峯の神名月更けて祭事あり

八幡の神酒皎たる月に干す

昭和十七年

冬晴 やさくららの花芽枝に満つ

曼珠沙華牧舎も牛も野に低き

佳き庭の松に楓に露の秋

二日ほどあしたゆふべの茸汁

十五夜の山の端松は立ちならび

十五夜のまことに峽の村とおもふ

月明の峠をあるきこころみぬ

晩秋やまひるを霧らふ槻並木

鴟去るや藪掘のゐて音もなし

冬
の
富
士
夕
空
つ
ね
に
あ
た
た
か
く

鉢
菊
に
む
さ
し
野
の
日
は
さ
し
わ
た
り

洲
に
下
り
て
み
ち
あ
り
寒
き
水
邊
ま
で

小春日の川洲に畑や菜を摘める

落葉舞ふ空あふがれて瀬に出でぬ

十年の知己また寄りて日向ぼこ

初詣 小さなきつむりを
両脇に

誇らしやししみじみ
仰ぐ 風の空

わが 國土わが 狹庭なる
梅ふふむ

冬 されや 梔子の 實を
掌

天澄むや愚かに巨き觀世音

松の上流るる秋の雲のひびき

絹糸を干すや照りあふ曼珠沙華

鰯雲松悉く横枝張る

秋の日の青々透る楓かな

水
仙
や
日
本
の
詩
の
潔
し

夕
月
や
木
々
の
さ
や
け
き
雪
の
後

灯
り
し
障
子
の
ま
へ
に
雪
の
畦

春雪に椎の葉群むらは黄なるかな

春夜の酒おのおの思ひ遣る心

初蝶やか黒く過ぐる汽車の前

頬白の頬に日の色檜芽ぐむ

雲雀野や筑波の片面^も枯いろに

菖蒲の芽土橋のふちも青みたる

春の汽車獲物の魚を臭はする

暖く乙女椿も焦げにけり

藁屋根を落つる風さへ夏隣

花吹雪うからと遊ぶ日もあらず

雪の嶺一朶のさくら垂るもとに

櫻里山房

花の晝たつきの繪筆子が洗ふ

野州三和村松田 四句

初河鹿硯の石を瀬に撰ぶ

機の灯のひとつ宛づ消え月朧

夜櫻 やすぐ 鳴き やみし 青葉木菟

春燈 や 磐石 と 見る 硯石

三寶寺池 四句

花の 幹に 凭れば 梢の 風こたふ

春雷 やさくらは 紅くこぶし 黄に

花の 幹かたぶく 池の花 明り

若 蘆 や 小 鴨 の す が た 没 る る ほ ど

後樂園涵徳亭 三句

若 楓 す で に 鬱 た り 欄 の 上

若 楓 色 ふ か め つ つ 暮 れ そ む る

若 楓 暮 る る 枝 振 墨 の 如 し

信濃遊草 七句

諏 訪 の 湖うみ に 波 さ や ぐ な り 競 べ 馬

峽の字幟の家紋皆同じ

松の花常念白き頂のみ

岩躑躅斑猫それて岩の面に

屋根替の棟を葺きをり四手櫻

若楓さやぎ常念岳ゆらぐ

惜 春 や 丹 の 廣 蓋 に 酒 も 冷 ゆ

麥 秋 の わ び し さ も 好 し さ さ げ 摘 む

小 説 な ど 書 き た き こ こ ろ 麥 の 秋

胡瓜の初ものを贈られて

初 胡 瓜 喜 雨 の 河 童 の 寝 姿 か

輕 井 澤 四 句

慈 悲 心 鳥 落 葉 松 の 秀 の 波 立 て る

悉く落葉松の青さ駒こ鳥ま鳴けり

諸鳥のこゑ大瑠璃のこゑ透る

ほととぎす新緑眞日をつつみたる

はからずも淺間山の爆發に遇ふ 五句

くらみゆく噴火の天に栃の花

鳴神や漆をながす噴煙に

晝の闇あな白玉の朴の花

鬼躑躅炎ゆるや噴火とどろける

夕若葉火山^よ灰^なのしぐれの幾わたり

小諸懐古園 四句

牧水の書の心直ぐなり萩若葉

孔雀の前野茨を髪に挿す人と

梅雨雲の淺間は見えぬ旅情の詩

泡吹蟲梅雨の薄日のこぼれくる

病中 十二句

夕焼や身を横たふる家の隅

カンク帽のせて業苦の頭かしら行く

朝顔や塀の上なる眞紅の日

眞紅の日ひとたび出でて朝曇

枕邊の百合や身よりも氣の弱り

青嵐病臥の夢のきれぎれに

一莖の撫子またも他よそ向ける

われに心動かさぬ子よ桃食へる

青嵐病めば風にもおびゆるを

山百合を剪るや五輪の花おもく

熱き湯にひとり身を拭く百合の前

杜影のしづかにゆらぎ月涼し

羽づくらふ雌雄の鳩や喜雨そそぐ

西窓の雨戸を閉きして晝寝つぐ

孤ひとり松まつ病葉赤く美しき

暮れかぬる花魁草の牡丹色

秋近き四方の杜影襯シヤ衣ツを干す

妹へ

新涼や征衣の夫は文机に

信州別所温泉 五句

夕虹やかかりゝと嚙みし青林檎

みんなんや湯錢袂に湯の町へ

同常樂寺

白描のみほとけに對むかふ今朝の秋

飲おん食じきのものみな菩薩秋の蠅

素枯れ立つ天竺牡丹蟻地獄

旅吟六句

火の山の緑へむかふ露の徑

鈴蟲や止りし驛の薄月夜

追分

蕎麥咲くやほろびしものの廓など

荷駄鞍の赤きも干され萩紫苑

葛の棚かざおといつも嵐めき

秋風や一と間を隠す葛の蔓

秋果庵と名づけ栗柿尙青し
病篤き友を訪ふ 三句

ひとつづつ秋の日色や柘榴の實

次の間にいたたく夕餉秋簾

少女らの居ずまひただし居待月

町空にふえし枯木や菊日和

鉢の菊ならびて楓の露止みぬ

花筒の萩挿しかへて居待月

棚雲を染めて居待の月こもる

櫻里山房

月まつる堤のすすき庭の萩

秋ふかき朝顔や羽織著て座すはる

乳ち呑のみ子ごの無きはやすしと妻の秋

妻のちから枯唐黍を仆しゆく

秋日和菜圃を守りて家ならば

小石川後樂園 六句

林泉やけふ色鳥のこゑ溢る

秋晴の鶴に五六歩したがひぬ

木蔭より木蔭を辿り秋日和

櫨紅葉しだるる影に寄る緋鯉

菖蒲田の一枚稲を架けしあり

市中や林泉の冬の寂びは好き

昭和十八年

向島百花園 二句

寒木瓜や再び三たび同じ徑

山茶花やお手玉の子の脛あらは

大友東三氏の靈に捧ぐ 三句

寒牡丹藝心獨り生きとほす

面影の去らず寒濤耳を離らず

大磯の冬咲く梅も見る由なし

天^{あめ}わたたる冬日も永し頬^ほ白飼ふ

冬暖やひびきひそめて瀬の迅き

寒の瀬や蘆の日向に添ひながら

松^{まつ}搖^ゆ鳥^{とり}松のあかるく日脚伸ぶ

海を見て歸る松原日脚伸ぶ

離^{はな}屋^れより母屋へ移り日脚伸ぶ

鵠沼四句

砂の上の麥あざやかに春時雨

枯菅に青き蓬に春時雨

砂にふる雨あし見えずこぼれ梅

砂除けの麥わら黄なる麥青む

枯山の間に火の山雪ふれり

嘯や火の山北に雪を負ふ

春の雲火の山にあり空になし

落葉松の寒林あかく芽ぐみそむ

梅白し落葉の澤をみぎひだり

原稿紙春日は椎に落ちたるや

梅散りて明るき月夜昏らき月夜

沈丁花道に匂へば吾が家にも

春の月西の星座をのこしける

菜園や彼岸月夜のおぼろめき

山茱萸の花にはやくも蟲柱

春の日のさし入る松は皆斜め

一輪の桔梗青富士といづれ濃き

髪洗ふ日本の髪結はんとて

葉櫻 吉野 十四句

葉櫻や金剛葛城の山かつら——吉野神宮

拍手や晝の霞のゆるがざり

檜皮葺四簷落花をちりばめし——吉水院

林泉の桃山ぶりや春惜む——竹林寺

馬酔木若葉鬱金櫻と照り匂ふ

は た た 神 鬱 金 櫻 の 閃 々 と

ひ び き ふ る 雨 千 本 の 葉 櫻 に — 中 千 本

檜 苗 落 花 の 中 に こ ぞ り 立 つ

行 く 春 や さ く ら 献 げ て 杉 蒼 し

菊 水 の 紋 な つ か し や 若 楓 — 如 意 輪 堂

雨の磴畏み蹈むや楠若葉——塔尾御陵

みささぎや花人あらず雨繁し

蔵王堂閉し金剛に春日没る——蔵王堂

春の雲焼けてぞ褪する丹の柱

深^み吉野の峽 五句
吉野や天長節の蔵飯

行く春や峽の町なる釣瓶鮓

山櫻盥に漬けて戸に凭する

春の暮大和は道の白き峽

なりはひの箸削る灯や蛙鳴く

吉野葛 四句

葉櫻やとろくかへる吉野葛

老どちの葛湯所望や餘花の雨

櫻湯や吉野の一重ひらきをり

花人のすぐころみし陀羅尼助

猪の罾 三句

棚田打つ老がゆびさす猪の罾

蕨狩猪罾を見にのぼりつめ

猪垣の邊へに晝蛙聞えくる

桐生川上流 三句

岩壺にとろりと青し蝌蚪の水

道普請みな山人のいでたちに

行く春や猶やまくさの咲き絶えず

雨の花木傳ふひかりとどまらず

庵の客英靈にさくら活ける

角間峽 八句

古障子赤し林檎の咲きあふれ

石垣を組みて棚田や濃山吹

新緑にたかぶり鳴くか
鷗みそさざい鷗さざい

一いち八はちや炭負ふ人のやすみ岩

炭 燒 に 祭 一 と 日 や 四 手 櫻

山 祭 新 樹 の 雨 に 磴 嶮 し

夕 牡 丹 左 右 の 澤 水 ひ び き あ ふ

慈 悲 心 鳥 落 花 の 地_ぢ に 霧 雫

麥 刈 の 最_さ 中 に 梨 の 袋 掛

黒南風や白しと見るは今年竹

いと高き節に一枚

たけのかは
籜

桑畑をまるくのこして梅雨曇

郭公や梅雨の火の山かたちなき

折からのさなぶりの酒もてなされ

郭公と葭切のこゑの植田かな

梅漬や一壺といへど庭の梅

信州、岩殿寺句會 三句

征く馬に授くる護符や蟬の寺

女衆の炊事の智恵や灯取蟲

朝涼や三面六臂草を引く

澤紫陽花わかものひとり木樵るなり

田草取萱^{くわん}草^{ぎょ}の花も引き捨てし

青田よりややにうすきは青林檎

壺の肩一點月のかげ涼し

輕井澤三句

白樺の蔭に到りて蟬涼し

朝涼のひと秋草を挿しにけり

朝鳥のときの間涼し蟬も鳴かず

晩夏高原七句

列車の灯遅々と銀河の尾をよぎる

雲あそぶ青野や麻は波うてる

にひはりの道の孤松に閑古鳥

虹の尾に落葉松昏くたたなはり

墾^{はり}みちや夕露はやき藤袴

露草や高原の汽車唯二輛

高原の驛のともしび草に澄む

芭蕉忌や齡不惑に芭蕉起つ

芭蕉忌や芭蕉の道のたがはざる

芭蕉忌や俳句精進是人間修業

月まつる花に雷火のたばしれる

飛び石をわたる素足や蟲を聴く

立待月ひとむらづつの草の露

立待月風情もはらに花すゝき

早紅葉の山抽んで日當れる

秋の日のやや闌けてより谷底に

杣人らけふ茸狩を愉しめる

葛紅葉高樋あふれて雨の如

雑ざふ茸だけの色とりどりに山料理

赤とんぼ木賊にすがり石に伏せ

三日月を山の端に見て澤暗し

水漬く稲豊の稔りのありくと

稲運び水漬きし稲をひたすらに

水漬き稲末枯草に干しならべ

山々の霧らひて柿の照りいでぬ

椎檜の露ぬるる日の初火鉢

小春風みみしひしやと野に立てり

柿紅葉貼りつく天の瑠璃深し

冬紅葉ゆたけき心うしなはじ

おほわたや機のひびきは兩側に

小春日のゆふべ浮世繪の富士を見き

雑木紅葉黃菊の畑をとりかこみ

山の端の松をのこして紅葉せり

昭和十九年

冬山や人家かならず瀬に添へる

落葉松の葉屑なつかし茸汁

山北

青空へすがたまどかに蜜柑山

富士風ここに吹かざり蜜柑山

下枝の蜜柑に觸るる菊白し

蜜柑山雲のかげりをわびしめり

風花やすでに粉をふく吊し柿

年玉に一聯提げし凍豆腐

雪舞ふや枯るる名草なぐさの起き伏しに

袖垣の雪を見しのみ障子閉づ

青軸の梅ほころびて風碧し

青軸の梅活けてそそぐ山清水

路の臺摘むよろこびの美しき

路の臺古陶の急須おほどかに

青天を隠し了おほせて梅さかり

富士風鳴りどよもせり峽の梅

梅夕べ函嶺暗く富士明し

雪晴の山たたなはり遠近無し

凍豆腐山川さんせんの日を吸ひつくす

信濃坂北 十句

姥捨の田毎明けつつ吹雪くなり

雪晴やこだましてゐる山鴉

群松の雪解に淵のあかるさよ

松風の止みて忽ち雪となりぬ

縁の雪掃きては楯を焚きつげる

山鳩を眞似る口笛雪に吹く

しづれ雪舞ふや櫟に濃き日影

しのび鳴く頬(ほ)白に楢の雪しづる

松の雪瀬の青渦にしづれつつ

凍る雪に下りし鶺鴒や嘴紅き

ただよへる青空春の吹雪止む

夜の吹雪忘れしほどに囀れり

囀の木々は深雪によりそへる

奥上州の或る村 六句

屋根石の尚磊々と春の雪

嶺の日や雪代の田に燃え映り

盆梅に手毬つく子に垂氷かな

雪解や馬の金沓打つひびき

熊笹の山はまどかや雪解風

菜園やつひに播かざる花の種

花了へてより一人の若楓

牡丹櫻俄かに春の深まりぬ

濃淡のさざめく若葉うち仰ぎ

木々包む河鹿のこゑは夜も晝も

傷療外氣舎 四句

雛菊や蜜蜂の家と名づけ住む

花の香と蜜蜂かよふよもの窓

手づくりの机にかざる白牡丹

きよらなる褥ひとつに青嵐

篠の葉とひるがへりつつ枝蛙

初夏やか弱き蟲が灯を取りに

新緑に宿りて厚き夜の衾

下闇に漂ふ花の矢車草

瀬の奥の縷々とつづきぬ山あやめ

松風や其の巨幹にけらつつき

山々の眞青なるとき百合白し

谷百合やあかつきの瀬を挟さしかみ

灯れば百合ひらきたる香に満ちぬ

武州妻沼 五句

星祭太た我か井みの杜にほとりしぬ

星合の別れの鮎鈍竹に懸け

放たれし牛をめぐりてきりぎりす

水^{かは} 楊^{やなぎ} さやぐ川洲や日の盛り

のうぜんの燃えたばしるや古簾

輕井澤 五句

蟬鳴かぬ山のしづけさ雲の峰

火^よ山灰^なのみちに轍の深くきりぎりす

白雲のたへにひかりて青胡桃

日々の朝涼に摘む山苺

山の蝶色とりどりに草涼し

角間峽 五句

岸壁の秋日しばらく澄みにけり

山峽かをながるる霧に早稲匂ふ

夕月夜しらくも峽に下りきたる

月明や澤あぢさゐの色あさく

釣船草岩をめぐりて黄に赤に

外氣舎句會 三句

外氣舎の絶えざる花も秋の花

この林秋蟬を聞けど遙かなり

外氣舎の戸につどふ月の友

尾上にも炭焼くけぶり露寒し

疎開する吾が子 二句

子の寝顔今宵一と夜の秋嶮に

秋風と家離る子よ強く生きよ

句筵に工衣の儘や草虱

工場に通ふ吾が子

つ つ み や る 熱 き む す び や 冬 隣

濡 縁 の 月 に 木 犀 の 壺 す は る

青 柿 の 二 つ 三 つ 宛^づ 露 ま み れ

大 露 に く づ を れ 沈 む 曼 珠 沙 華

赤 蜻 蛉 谷 深 き 日 に 舞 ひ よ ど む

穂刈して粟あざやかに紅葉しぬ

のこる蟲尙瀬の音にまぎれざる

たぎつ瀬やものの枯れゆく山の香に

屋根石や赤き南瓜も干されたる

學徒動員の長男

傷つける黒きてのひら柿を愛づ

卷脚絆解く宵毎に冬深む

學童疎開の長女

大根運び炭運びなど子の便り

柏原誹諧寺 三句

誹諧寺無住に荒れて草紅葉

一茶の像露はしきりに檐を漏る

露の墓ただびとならぬ一茶翁

一茶終焉の土藏

朝寒や空まると見えの藏の中

野尻湖 三句

棚雲に三つ竝ぶ山の紅葉かな

みづうみや洲をかけりゆく秋の蝶

暮の秋一日の湖の風ぎ荒るる

昭和二十年

鐵
兜
負
ひ
出
づ
る
朝
な
散
紅
葉

空
襲
下
家
々
冬
の
紅
葉
濃
し

空
襲
の
斯
か
る
し
づ
け
さ
夕
時
雨

待
避
壕
に
う
た
ふ
子
あ
り
て
雨
寒
し

空に備へ寒燈に芭蕉七部集

事もなく明けし庭木に笹鳴ける

落葉焚く火を踏み消して日短き

疎開の子何も問ひ來ず年行きぬ

谷底に炭竈ふえて雪深し

山晴るる日は風花や炭を焼く

炭木樵る餅も絶えず炭を焼く

炭竈や月を燻して燃えつづく

夜の雪に炭炎々と掻き出せる

友の家にて 四句

風 呂 吹 や 友 の 蔭 膳 と 差 向 ひ

齒 に あ て し 菜 漬 の 氷 な つ か し く

疎 間 風 背 山 の 松 の 韻^{ひびき} あ り

雉 子 鳴 い て 霽 る る と い へ ば 深 雪 晴

出 勤 や 立 春 の 朝 日 樹 に 高 く

雛の日の山里にある子を想ふ

町を離れ野にとどまりつ日脚伸ぶ

信濃若槻 四句

雪解風槻の大幹磨ぎ澄まし

萱葺の厚き庇や雪解風

山茱萸の枝活けられて雪明り

大 櫛 や 雪 脱 ぐ 音 の 荒 々 し

末の子と妹を信州に疎開させて 五句

春 炬 燵 吾 が 友 に 吾 が 子 迎 へ ら れ

手 を 拍 つ て 春 嶺 の 雪 を 子 も 讃 ふ

背 負 ひ 來 し 鍋 釜 な ら べ 暖 か き

や す ら ぎ や 露 の 臺 な ど 縁 に 干 し

初 蕨 吾 が 子 も 山 に 慣 れ に け り

ち る さ く ら よ べ に は 火 の 粉 の ふ り し 庭

灰 燼 や す で に 暮 春 の 日 の ひ か り

戦 陣 と 云 は む あ け く れ 若 楓

春 暮 る る 勤 の 道 の 焦 土 か な

信濃坂北 十四句

囀のゆるるがす枝垂櫻かな

初蛙林檎の枝を下ろす日に

翁草春酣の山わびびし

囀や家をめぐりてみそさざい

筍や炊ぎの水の涸れそめて

青東風にさやぎあひつつ林檎生なる

大幹をめぐるかをりや朴の花

水鶏鳴くころは寢覺めの吾ひとり

空に備へ白壁汚よごす牡丹かな

七月も筍掘りの藪涼し

梅雨の暮白き菖蒲をゑらび剪る

里の子の呼べる吾が子や螢狩

をさな子の手にみちびかれ螢狩

寺に住む女子供やほととぎす

吾が家のいまだ全し梅漬くる

こ
で
ま
り
や
い
と
け
な
き
者
家
に
無
く

焦
土
に
も
道
あ
り
遠
き
青
葉
木
菟

向
日
葵
の
天
尙
深
く
曇
り
け
り

八月十五日

秋
風
や
お
お
き
み
む
ね
に
い
だ
か
る
る

秋
蟬
や
憩
ふ
芝
生
も
伸
び
荒
れ
し

秋 蟬 の 聲 や 茅 萱 に ふ り し き る

晝 の 蟲 み な 長 鳴 け り 萱 の 道

秋 の 蟬 鳴 き を は る 孤 松 静 か な り

秋 風 や 赤 く 見 ゆ る は 黍 車

洲 に 立 て ば 黍 と 空 な り 初 嵐

後記

前句集「菜園」以後、昭和十六年一月から昭和二十年八月まで各誌に発表した作品約一千五百句中より五百餘句を自選した。発表年別になつてゐるので、年頭に並んだ句は前年の秋頃の作品である。

戦争生活を詠へる作品は、今日の眼で見てよしと信ずるものだけを残した。

たたかひが激しくなつても、「菜園」の句を作つた当時よりはる

かに私は旅行してゐる。純粹な自然諷詠の作品を得たいからであつた。

○

句集の装幀者である近藤晴彦畫伯曰く、「白地に赤い日の丸と、旗竿の黒いだんだらは日本人の最も好む原始的な色調であり、永遠に鮮やかな色調である。私はこの美しさを装幀に表現したつもりである」と。

上梓について「暖流」の會員諸氏から大へん世話になったことを記して感謝の意を表す。

常 念

印刷 昭和二十一年七月十日
發行 昭和二十一年七月十五日

定價 金七圓八十錢

(稅共)

著 者 瀧 春 一

發行者 小 內 正 次
東京都世田谷區世田谷二ノ一四五六

印刷者 岸 田 武 男
東京都大森區北千束町七七二

發行所 五 月 書 房
東京都世田谷區世田谷二ノ一四五六

配給所 日本出版配給株式會社
東京都神田區波路町二ノ九